Japanese Association of Educational Psychology

記憶過程の発達的変化 (012〜018)

座長 保坂 真理・森 敏昭

012 幼児の記憶過程における体制化と知識体系の影響について
仙台市東社会福祉事務所 加藤陽子

013 再認記憶におけるイメージ教示と言語教示の効果
北海道大学 小島康次

014 単語と文の記憶の発達的研究
筑波大学 保坂真理
東京学芸大学 須藤貢明

015 聴覚障害児の系列的言語記憶の発達的変化
—項目間特性による検討—
筑波大学 都築繁幸

016 子どもの情報処理における刺激命名教示の効果
大阪教育大学 金子由美子

017 幼児における記憶体制化の基礎的研究(1)
—分類能力と記憶範囲からの検討—
名古屋市 大久保義美

018 幼児における記憶の体制化過程の分析(18)
広島大学 森敏昭
長崎大学 宮崎正明
広島大学 加来秀俊

質疑応答

012 に藤田（奈良教大）から，親近性の測定はどのようになされたものかという質問があった。これに対し加藤は事前に親近性のテストを行い，それに基づいて親近性の高いものと低いものを選ぶ，その程度は命名できるか否か，分類可能か否かなどによって点数化すると答えた。

013 に北尾（大阪教大）から，再認リストについての質問があり，小島は 1/4 は記銘リストにあった項目と意味もモードも同じ項目，2/4 は意味は記銘リストと同じだがモードが記銘時と逆の項目で，残りの 1/4 は意味の異なる項目であり，分析はモード逆転項目についてのみ行ったと答えた。

014 に小島（北大）から，実験材料にランダム単語，音的類似単語，同一カテゴリー単語があるが，それらのリスト項目のファミリアリティに違いがあるのではないか，そのコントロールはしているのかどうかという質問があり，それに対し保坂は特にファミリアリティについての検査は行っていないが，単語は幼児対象の絵本から選んだと答えた。

015 に北尾（大阪教大）から，形式リストというのは単に音韻的類似性の高いリストということであるかという質問に対し，都築はそうであると答えた。また，須藤（東学大）からカテゴリーの大小の規定について質問を受け，都築はその点に関しては考慮していないと答えた。

016 に森（広大）から，材料に犬，木，本を用いているが，それぞれの知識に左右されないかという質問に対し，金子は犬は犬，木は木，本は本との比較なので問題はないと答えた。

017 に小島から，① RMS の測定方法，② RMS を用いたことの意味づけに関して質問があった。大久保は①数字あるいはアルファベットが 1 字ずつ同じ位置に系列的に指示し，予告なしに系列をストップした時点で，逆順序に再生させることによって求める。②いくつかあるが，情報の処理の仕方に関連が深いと考えられること，個人差が出やすいことなどである，と答えた。また，小島から容量自体の発達は考えていないのかという質問に対し，考えていると答えた。

018 に小島から，臨接項目の反復について質問があり，森は 4 才児に比べて 5 才児は系列手がかりを与える条件において「大きいもの」「小さいもの」「中くらいのもの」というように原リストの大きさの系列で臨接する項目どおしを連続して再生する傾向が若干強いと答えた。また須藤から，記憶における体制化のためのカテゴリーの探求と，この研究を理解できるのかという質問があり，それに対し森は，これまで研究してきた概念カテゴリーによる群化の現象が大きさについての系列性による群化にもみられるかどうか，つまり一般化できるかどうかを検討することが目的であると答えた。

全体の討論

グループ分けが難しいので，自由な討論の形で進められた。

まず，小林（近畿大）から森に対して次のような意見が述べられた；この研究で使用されている動物の大きさの順位づけはあくまでも実験者側における順位づけであり，予め実験に用いた被験者と同じ年齢の別の被験者で，子どもが本来もっている大きさの順位づけをチェックした方が良いと考えられる。これに対し森は，それも必要であり今後考えてみたいと述べた。

次に藤田から加藤に対して①親近性の効果が顕著で関連性の効果が出ないという結果が得られているが，従来多くの研究で得られたような R>UR という結果が得ら

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

れなかったことは，リスト提示の仕方に問題があるのではないか。②親近性と関連性を組み合わせた4つのリストを同一の者が記銘するというパラダイムが行われているが，独立の群の者に与える方が適切なのではないか，この方法を用いた積極的な理由は何かという質問が出された。これに対し加藤は①リスト提示順序があまり再生量に関係ないことを確かめてあるが，確かに何らかの影響があったのかもしれない，②別個に考えていくと結果はすっきり出てくるが，それでは子どもがどこで覚えるのか，あるいは情報を取り入れているのかがわからない，と答えた。

また，北尾から都築と保坂に対して，聴覚障害の特質との対応づけで，どんな記憶過程に欠陥があるかを解明する研究が望まれる，知識体制の欠陥というだけでは聴覚障害児のみの特質とはいえない，ということがいわれた。これに対し都築は全くその通りである，そして，健聴児になされた研究をそのまま聴覚障害児に行おうとは考えていない，聴覚障害児の特性を明らかにしていきたいがまだまだ研究が十分でないと述べた。また，保坂は記憶の研究を言語指導との関連で考えていると述べた。

さらに，この特定テーマ「記憶過程の発達的変化」における主要な論点であると考えられる「知識体系と記憶の関係をどのようにとらえるか」という話題が湯川（大阪市大）から出された。それに対し，まず森は最初は記憶の研究をしてきたが，記憶には被験者の知識が影響を及ぼしているということをだんだん無視できなくなってきた，そこで研究を進めていく場合には記憶と知識構造をなんらかの形で分離しなければごっちゃになってしまうという危具を感じていると述べた。森の意見に対し小島は記憶の研究と知識の研究をあまり明確に分けない方が発展性があるのではないかと述べた。また，加藤はそもそも記憶そのものを研究するつもりではなく，子どもが物を見たときにどのように理解していくのかということが知りたくて研究を行っていると述べた。さらに湯川は，いろいろ考えると実験がやれなくなってしまうが，分類させるという場合にも1つのストラテジーがはいるし，記憶させる場合にも別のストラテジーがはいってくる，その2つを比べても何も出てこないのではないか，ストラテジーの発達を見ようとするならば，もっといい方法はないのかというように考えていくと突破口が開けてくるのではないか，知識を調べようとすると一番基にあるモヤモヤしたものがなかなかつかまらないと述べた。それに対して大久保は，ストラテジーの発達を調べたいと考えているが，よい方法が見つからずカテゴリー材料による体制化研究を行っている。知識体系と記憶は，全く別の物でも，またまったく同じものでもないと思う，まったく別の部分と重なり合った部分の両方があるのではないかと述べた。また，北尾は知識体制の発達を研究するのに記憶実験を使うというのは効率がよくない。知識体制の発達と記憶プロセスの不一致を明らかにする方が大事ではないか，その場合，その不一致を説明するのにストラテジーということばを乱用すると一般性がなくなってくる。もう少しストラテジーの奥にある learning process を基にして理論化していく方が記憶の発達の研究としては大事ではないか，と述べた。藤田はプロセスを問題にしようと思ったら，処理の水準のようなものを考えると，知識体系とか認知構造とかストラテジーの発達の研究にもっていけるのではないかと述べた。須藤は直後再生でいろいろなことを推察しても推察の域を出ないのではないか，実験方法そのものを変えていく必要がある。聴覚障害児は音声言語の欠如からいわゆるデータベースが普通児とは異なっている，それをどのように記述するかはいろいろな仮説をぶっつけてやってみる以外はないと述べた。

最後に北尾から小島へ，再認実験を行ったときの結果の処理方法に関して，虚再認数については比によって，イメージ教示と言語教示の効果を比較すべきであるとの指摘があった。

今後の課題

記憶の発達的研究は，近年急速に実験データが増加している領域の1つであるが，記憶発達に関する我々の理解の深まりは，必ずしもデータ量の増加に比例していないのではなかろうか。その原因はおそらく，理論の未成熟にあるといってよいであろう。したがって，今後は，様々な理論的背景のもとに，様々な実験パラダイムを用いて得られたデータを整合的に説明・予測できるような理論を構築することが，この領域の重要な課題となろう。そのためには，まず，用語の定義を明確にすることが必要なのではなかろうか。例えば，このセッションにおいて「知識体系と記憶との関係をどう考えるべきか」という論議がなされたが，必ずしも明快な議論にならなかった。その原因の1つは「知識体系」という用語の定義が研究者によって若干異なっていたからではないかと考えられる。実験操作とそれに対する実験データを基礎にして，用語の定義を厳密化することなしには，実りある理論の構築は望めないのではなかろうか。

（保坂　真理・森　敏昭）

NII-Electronic Library Service